

『改訂版 必携 英単語 LEAP』に抱く熱き思い

竹岡 広信

1. 謝辞

2018年に発行した『必携 英単語 LEAP』（以下、『LEAP』）は、幸いなことに、全国で非常に多くの高等学校で採用していただいております。そしてこの度、ご支持いただきました先生方、生徒の皆様のおかげをもちまして、改訂する運びとなりました。心より御礼を申し上げます。

今回の改訂では、私、竹岡や編集者の熱き思いに加え、先生方から頂戴いたしましたご意見・ご要望を反映させることで、『LEAP』の内容をさらに完成度の高いものにいたしました。改訂となるポイントの1つは、300語以上（予定）の語彙数の増強です。もう1つは、新たに紙面に掲載したQRコードからさまざまな種類のデジタルコンテンツを利用できるようにしたことです。これらにより、一層魅力的な英単語集になったと自負しております。

2. 改訂のポイント

今回の改訂では、初版から踏襲している『LEAP』の基本コンセプト（→「3. 『LEAP』の基本コンセプト」）に加えて、主に、次のような変更を行います。

(1) 見出語の増加 (1,935 → 2,300 語 ※予定)

見出語を1,935語から2,300語に365語増やします。これは、ご採用校等からのご要望があったことに加えて、近年の大学入学共通テストの出題傾向からもわかるとおり、大学入試で求められる語彙力が全体的に上がっていることを考慮した結果です。

新規に追加した単語は、毎年、教員セミナーで開示している資料（主要な私大とほぼすべての国公立大学の入試を生徒に解かせ、添削・解説した資料）や、黎明期からの英検準1級の問題、さらには最新コーパスなどを分析した結果から、必要と思われるものを厳選いたしました。改訂版で追加した単語は、

大きく3つのグループに分類されます。1つめのグループは、「初版『LEAP』では派生語や参考語句扱いだったが、重要度が高いため、改訂版では新規に見出語として掲載する単語」で、cognitive「認知の」、latitude「緯度」、ubiquitous「偏在する」、outrageous「常軌を逸した」、entrepreneur「起業家」などがあります。2つめのグループは、「大学入試問題では語句注がつけられることが多いが、出題頻度が高い単語」で、deem O C「OをCとと思う」、refute「～に反駁する」、resilient「回復力のある」、smuggle「～を密輸する」、dementia「認知症」、salvation「救済」などです。最後のグループは、「英検準1級レベルの単語」でcarnivore「肉食動物」、bilateral「二国間の」、culprit「犯人」などにあたります。

「大きな水槽で飼うと、金魚も大きく成長する」と言われます。今回の改訂における見出語の増加は、我々、教師が小さな水槽を強要するのではなく、少しでも大きな水槽を与えることが大切だという考えに基づいています。「丸暗記を強要する単語集」では語彙の増強は生徒にかなりの負担を強いますが、『LEAP』では、「語源」や「語呂合わせ」といった暗記のためのヒントを豊富に掲載しているため、語彙が増えても生徒の負担はそれほど大きくならないだろうと考えた末の決断です。

2,300語のうち、学習者に必ず覚えていただきたい2,000語は初版と同様にPart 1～4に掲載し、残りの300語については、改訂版で新設した「+α」（*Part 1～4をマスターしたあとに取り組む巻末付録パート）に掲載しました。この「+α」のパートには、文字どおり、最難関国公立・私大対策として、「+α」で覚えておくくと有益な難単語を掲載しています。

書籍全体の見出語を1,935 → 2,300語に増加したことで、最難関国公立・私大受験・英検準1級に対応可能な英単語集として、最良のものができたと確

信しております。

(2) 充実した QR コードコンテンツ (3 種類)

改訂版では各 Part の冒頭 (トビラページ) などに QR コードを掲載して、下記 3 種類のコンテンツを配信いたします (* コンテンツは 2024 年 12 月から順次リリース予定)。

① 音声データ：本冊掲載の見出語・用例の音声データ (初版と同様の計 4 種類)

- (a) 単語 (英→日)：単語の意味の確認用
- (b) 用例 (英→日)：英文解釈用
〈英語を「聞く」トレーニング〉
- (c) 用例 (日→英)：口頭英作文用
〈英語で「話す」トレーニング〉
- (d) 用例 (英のみ)：ディクテーション / シャドウイング用

ご利用方法を、初版「ホームページからのダウンロード配信」→改訂版「QR コード配信」に変更いたしました。パソコンでデータをダウンロードする手間がなくなり、スマホやタブレットなどを用いて、手軽に、発音の確認と音声トレーニングができるようになります。

② 解説動画：竹岡自身が、下記 3 種類の内容を講義形式で解説いたします (約 5 分×計 22 本 ※予定)

- (a) 語源 (代表的な接頭辞・接尾辞・語根)
- (b) 英語の発音・アクセント
- (c) 英作文に役立つ「英単語の使い方」
(類義語の使い分けなど)

いずれの内容も、日ごろ、竹岡が予備校で教えているもので、英語の語彙力と発信力を増強するためには有益の内容ばかりです。是非、何回も視聴していただき、マスターしていただきたいと思います。

③ ドリル問題：本冊掲載の全見出語に関するドリル問題 (計 4 種類)

- (a) 単語 (英→日)
[例] oppose
(1) ～に反対する (2) ～に賛成する
(3) ～に向き合う (4) ～に忠告する

- (b) 単語 (日→英)
[例] 感情 (1) emotion (2) shame
(3) ambition (4) sense

- (c) 用例 (英→日)
[例] struggle to bring up my children
子どもたちを育てるのに ()
(1) 疲れる (2) お金がかかる
(3) 没頭する (4) 苦闘する

- (d) 用例 (日→英)
[例] 人生の意味を理解する
() the meaning of life
(1) speculate (2) mentor
(3) grasp (4) foresee

初版では、数研出版のアプリ「数研 Library」で一問一答のドリル問題を配信していましたが、改訂版では、QR コードから手軽にアクセスして、本冊の復習をしていただけます。

以上のように、改訂版『LEAP』では、学習者の語彙力増強により資するよう、さまざまな要素を追加いたしました。新要素について、ぜひ、ご活用いただけますと幸いです。

次に、初版をご採用いただいた高等学校の先生方はすでによくご存じかとは思いますが、初版から踏襲する『LEAP』の基本コンセプトについて、再確認したいと思います。(以下の「3. 『LEAP』の基本コンセプト」は、『チャートネットワーク 86 号』(2018)に掲載した記事の一部を加筆・修正したものです。)

3. 『LEAP』の基本コンセプト

(1) Active Vocabulary と Passive Vocabulary

改訂版『LEAP』は、英単語集としては異例の多さである 576 ページ (予定) で構成されています。これは、見出語 (Part 1 ~ 4 と新設の「+a」) に、できる限り、「語のイメージ」や「暗記するための手がかり (語源や語呂合わせなど)」を掲載し、英単語の「丸暗記」にならないように工夫しているためです。さらに、Part 1, 2 にあたる Active Vocabulary (発信語彙) には「使えるようにするための詳細な解説」を掲載しているためでもあります。従来の英単語集とは、各単語に関する解説・情報量に格段の差があり、この圧倒的な情報量が『LEAP』

を Writing・Speaking にも対応可能な発信型の英単語集とならしめております。

もちろん、すべての英単語を Active Vocabulary として使いこなせるようになることが理想ではありますが、現実的には困難です。よって、信頼できるネイティブスピーカーの意見と、竹岡の長年に渡る英語指導経験に基づき、高校生が「Writing や Speaking で使う可能性の高い語」を Active Vocabulary に分類し、「発信するときに使う頻度は低いが、Reading や Listening では確実に意味が分かるようにすべき語」は Passive Vocabulary に分類しました。この分類は、Passive Vocabulary に分類された単語は「使わなくてもよい」という意味ではなく、まずは Active Vocabulary に分類された語を自由に使いこなせるようになってほしいという考えに基づいています。なお、今回の改訂では Active と Passive に収録されている単語の見直しを行い、適宜、入れ替えを行っています。

(2) CEFR レベルの表記

改訂版『LEAP』は合計 2,300 語で構成されています。まず、Part 1 では主に CEFR レベルが A1, A2 の語で、かつ「日本人が Writing や Speaking で最も使う語」を 400 語に厳選しました。agree / mean / communicate / effort など「これは本当によく使う」という語ばかりです。Part 2 では、主に、A2, B1 レベルの語を中心として「日本人が Writing や Speaking でよく使う語」を 600 語選びました。relationship / statistics / destination などです。いずれも「これも使うだろうな」という単語です。ただし、B2 レベルでも、ほかの単語で言い換えることができなく、かつ、よく使う単語 (environment など) もこの Part に収録しました。

もちろん、Passive Vocabulary を扱う Part 3, 4, および、「+α」に収録されている見出語の中にも Writing で使う可能性のある単語があります。「これは使うよ」という声が聞こえてきそうな単語もあります。たとえば、geography「地理」(CEFR レベル B1) という単語です。確かに一見よく使いそうですが、「詳細な使い方」を学習する必要があるとは思えません。このように、一見使うように見えてもそうでない語は、Part 3, 4 や「+α」に掲載しました。

CEFR レベルは確固たる evidence となります。

実際に英作文の指導経験があれば、「Active Vocabulary と Passive Vocabulary の線引き」の基準として「この単語は生徒には無理があるな」ということが直観でわかるでしょう。しかし、それだけでは生徒に対して evidence が示せません。たとえば、生徒に「seldom は使わないほうがいいよ」と言っても、さまざまな「参考書」に seldom = rarely = hardly ever と書いてあれば、「なぜダメなのですか？」と食い下がられてしまいます。その場にネイティブスピーカーがいて“Seldom is seldom used.”などのパンチのある一言を頂ければ生徒も納得するでしょうが、授業でいつもネイティブスピーカーが常駐しているわけではありません。ところが、「seldom は CEFR レベルでは B2 だから、かなり使用頻度の低い単語だよ」と言えば、生徒も納得せざるをえなくなります。これは非常に大きな武器です。こういった意味でも、本書の見出語に CEFR レベルを掲載する意義は大きいと思っています。

(3) 語のニュアンス

各単語のニュアンス (イメージ) を伝えるために、以下のような工夫をしております。まず各単語のニュアンスをできるだけ簡潔に説明しました。たとえば、individual (Part 2) には「(社会、集団を意識している場合の) 個人、個体」というニュアンスを、dispute (Part 4) には「(長期間にわたる深刻な) 論争、争い (*controversy より一般的な語)」というニュアンスを記載しました。

そして、「グルーピング」によって意味の似た語を並べております。たとえば、stare (Part 2) のニュアンスは「(意識的に) じっと見つめる」ですが、gaze「(無意識のうちに) じっと見つめる、見入る、見とれる」と並べて掲載することで、類義語とのニュアンスの差を理解しやすくし、自然と語の使い分けができるように工夫しました。

(4) 「頻出」「注意」〈Active Vocabulary (Part 1, 2)〉

Active Vocabulary (Part 1, 2) には「頻出」「注意」という項目を掲載しました。「頻出」は「発信」の際、必要だと思われる重要な熟語、定型表現を厳選し掲載しました。また、「注意」はその語を使った「発信」を行う際、生徒がよく間違えるポイントを掲載しました。たとえば、skill の「頻出」

では、improve[develop] *one's* ~ skills 「～の力を伸ばす」を掲載しました。この skill を複数形にできる生徒は非常に少ないからです。phenomenon の「注意」では「日本語ではしばしば『～という現象』と表現するが phenomenon は that 節をとらない。([×] a phenomenon that S V))」と解説しています。また、culture を「文化」と覚えているが、「温泉は日本文化です。」を Hot springs are a part[an aspect] of Japanese culture. と書ける生徒はほとんどいません。そのため、culture の「注意」には Japanese culture の場合、culture は「日本文化全体」を表す不可算名詞で、「その中の1つ」であることを伝えるためには a part[an aspect] of ～が必要となることを説明に加えました。

(5) 基本動詞へのこだわり

英作文の授業をしていると、頻繁に登場するのが基本動詞です。高校3年生の上級クラスでも「彼が昨日私に話してくれたレストラン」を the restaurant (that) he told me about yesterday と書ける生徒は10%もいません。なぜでしょうか？答えは明白です。tell の用法を「きちんと」習う機会がなかったからです。「人に～を話す」を英語にする場合、〈tell + (人) + ～〉となるのは例外的で、ふつうは〈tell + (人) + about ～〉と表現しますが、そのように習う機会が少ないのです。その結果、生徒は、高3くらいに英作文を始めた段階でようやく、「基本語が運用できていないこと」に気がつくわけです。

現在、高等学校で使われている英単語集の多くは、そのような(英語での「発信」に重要な)基本動詞を掲載していません。しかし、本書では、本編(Part 1～4)の前提として、「基本動詞」を解説するページを設けております。そこでは、まず、重要な基本動詞を42語厳選し、そのコアとなるイメージを伝え、activeな用法を精選して掲載しました。また、基本動詞の解説は、どうしても「しつこく」なりがちなので、「簡潔に」なるよう配慮いたしました。

(6) 語源や語呂合わせで丸暗記を打破！

かつて一世を風靡し、竹岡も購入した単語集には、各単語に語源が掲載されていました。たとえば、invent なら in-[上] + -vent[来る]と表記されていましたが、頭の硬かった当時の私は「inは[中]やる！」と、in = [上]に耐えられず、そこに書かれ

ている語源を一切無視しました。in = [上]のような記述は、語源に詳しい人には抵抗なく受け入れられるのですが、その当時の私のように「融通の利かない人」には余計な負担となり、「語源=面倒くさい」という先入観をもたせかねません。そこで、本書では、そのような負担を軽減するために、語源を示す場合には、その連想の過程をできるだけかみ砕き、具体的に示し、さらに、同語源の単語を掲載することで理解を深める工夫をしております。たとえば、revolution 「革命」は、re-[逆に] + -vol-[回る]から「逆回転して、権力や組織をひっくり返す」→「革命」と掲載し、同語源の語として involve 「～を巻き込む」(in-[中に] + -vol-[回る])を紹介しています。

語源とは本当は「音」を中心として編んでいくもので、「なんとなく音がつながっていくな」という認識が肝心です。baby 「赤ん坊(←バーバーと意味不明な言葉を話すもの)」, barbarian 「野蛮人(←バーバーと意味不明な言葉を話す人)」 barren 「(野蛮人の住む→)不毛の(地)」とつながるわけです。ほかにも、mouth は「口(←突き出たもの)」, mountain 「山(←突き出たもの)」, menace 「脅かす(←突き出る)」をなんとなく「m-の音が共通しているよね」くらいの認識で捉えたほうがよいでしょう。「なんとなく音でつながっている」という認識ができれば上級者の仲間入りです。本書では、その「なんとなくつながっている」「覚えやすい」とことんこだわり、かつ「従来の語源を説明する際の煩雑さ」をぐっと軽減させております。

また、語源での説明が難しい語には、「語呂合わせ」などを採用し、疲れた頭を休めてもらうようにしました。cattle 「(集合的に)牛」の語呂合わせは「うちの実家、「牛」飼っとる」です。

4. 最後に

「英語教育を一步でも進めたい」という竹岡と数研出版の方々(編集、渉外担当など)の熱き思いの結晶である『LEAP』でしたが、今回の改訂でさらに理想に近づいたと考えております。是非一度ご覧ください。

(駿台予備学校講師、Gakken プライムゼミ特任講師、竹岡塾主宰)